

宇治拾遺物語

三 鬼に瘤とらるゝ事「卷一・二」

これも昔、右の顔に大きな瘤ある翁ありけり。大柑子の程なり。人に交じるに及ばねば、薪をとりて世を過ぐる程に、山の中に心にもあらずとまりぬ。また木こりもなかりけり。恐ろしさすべき方なし。木のうつほのありけるにはひ入りて、目も合はず屈まりあたる程に、遙かより人の音多くして、とどめき来る音す。いかにも山の中ただ一人あたるに、人のけはひのしければ、少しいき出づる心地して見出しければ、大方やうやうさまさまなる者ども、赤き色には青き物を着、黒き色には赤き物を禪にかき、大方目一つある者あり、口なき者など、大方いかにもいふべきにあらぬ者ども百人ばかりひしめき集まりて、火を天の目のごとくにともして、我があたるうつほ木の前にあまはりぬ。大方いとど物覚えす。

宗とあると見ゆる鬼横座にゐたり。うらうへに二ならびに居なむたる鬼、数を知らず。その姿おのおの言ひ尽くしがたし。酒参らせ、遊ぶ有様、この世の人のする定なり。たびたび土器始りて宗との鬼殊の外に酔ひたる様なり。末より若き鬼一人立ちて、折敷く(をしき)をかざして、何といふにか、くどきくせせる事をいひて、横座の鬼

の前に練り出でてくどくめり。横座の鬼盃を左の手に持ちて笑みこだれたるさま、ただこの世の人のごとし。舞うて入りぬ。次第に下より舞ふ。悪しく、よく舞ふもあり。

あさましと見る程に、横座にゐたる鬼のいふやう、「今宵の御遊びこそいつにもすぐれたれ。ただし、さも珍しからん奏でを見ばや」などいふに、この翁物の憑きたりけるにや、また然るべく神仏の思はせ給ひけるにや、「あはれ、走り出でて舞はばや」と思ふを、一度は思ひ返しつ。それに何となく鬼どもがうち揚げたる拍子のよげに聞えければ、「さもあれ、ただ走り出でて舞ひてん、死なばさてありなん」と思ひとりて、木のうつほより烏帽子は鼻に垂れかけたる翁の、腰に斧といふ木伐る物さして、横座の鬼のゐたる前に踊り出でたり。この鬼ども踊りあがりて、「こは何ぞ」と騒ぎ合へり。翁伸びあがり屈まりて、舞ふべき限り、すぢりもちり、ゑい声を出して一庭を走りまはり舞ふ。横座の鬼の曰く、「多くの年比この遊びをしつれども、いまだかかる者にこそあはざりつれ。今よりこの翁、かやうの御遊びに必ず参れ」といふ。翁申すやう、「沙汰に及び候はず、参り候ふべし。この度にはかにて納めの手も忘れ候ひにたり。かやうに御覧にかなひ候はば、静かにつかうまつり候はん」といふ。横座の鬼、「いみじく申したり。必ず参るべきなり」といふ。奥の座の

三番にゐたる鬼、「この翁はかくは申し候へども、参らぬ事も候はずらんと覚え候ふに、質をや取らるべく候ふらん」といふ。横座の鬼、「然るべし、然るべし」といひて「何をか取るべき」と、おのおの言ひ沙汰するに、横座の鬼のいふやう、「かの翁が面にある瘤を取るべき。瘤は福の物なれば、それをや惜しみ思ふらん」といふに、翁がいふやう、「ただ目鼻をば召すとも、この瘤は許し給候はん。年比持ちて候ふ物を故なく召されん、すぢなき事に候ひなん」といへば、横座の鬼、「かう惜しみ申すものなり。ただそれを取るべし」といへば鬼寄りて、「さは取るぞ」とてねぢて引くに、大方痛き事なし。さて、「必ずこの度の御遊びに参るべし」とて暁に鳥など鳴きぬれば、鬼ども帰りぬ。翁顔を探るに、年比ありし瘤跡なく、かいのごひたるやうにつやつやなかりければ、木こらん事も忘れて家に帰りぬ。妻の姥「こはいかなりつる事ぞ」と問へば、しかじかと語る。「あさましきことかな」といふ。

隣にある翁、左の顔に大きな瘤ありけるが、この翁、瘤の失せたるを見て、「こはいかにして瘤は失せ給ひたるぞ。いづのこなる医師の取り申したるぞ。我に伝え給へ。この瘤取らん」といひければ、「これは医師の取りたるにもあらず。しかじかの事ありて、鬼の取りたるなり」といひければ「我その定にして取らん」とて、事の次第を

- 3 -

こまかに問ひければ、教えつ。この翁いふままにして、その木のうつほに入りて待ちければ、まことに聞くやうにして、鬼ども出で来たり。ゐまはりて酒飲み遊びて、「いづら、翁は参りたるか」といひければ、この翁恐ろしと思ひながら揺るぎ出でたれば、鬼ども「ここに翁参りて候ふ」と申せば、横座の鬼、「この度はわろく舞うたり。かへすがへわろし。その取りたりし質の瘤返し賜べ」といひければ、末つ方より鬼出で来て、「質の瘤返し賜ぶぞ」とて、今片方の顔に投げつけたりければ、うらうへに瘤つきたる翁にこそなりたりけれ。物羨みはすまじき事なりとか。

- 4 -